

# パリ通信・第168号

## ルーブル美術館「ジャック・ルイ・ダヴィッド展」

師走に入り、今年も残すところあと僅かになった。一年を振り返る時期だが、何と云ってもルーブル美術館強盗事件は衝撃的だった。

10月19日日曜日の朝、工事を装った梯子車で「アポロンの間」の窓を破り侵入、ダイヤモンド、ルビー、エメラルドで飾ったフランス王家の宝を持ち出すという大胆極まりない強盗だ。通行人の通報で警察官が駆けつけ、バイクで逃げる犯人を追いかけるも捕えることができなかった。2ヶ月を過ぎようとする今、4名の実行犯は捕まったものの盗品は出てこない。



2024年入場者数世界一(870万人)がルーブル美術館だ。第二位ヴァチカン美術館(680万人)、三位大英博物館(647万人)の順で、世界一の美術館であるにも関わらず、監視カメラの不備、警備員不足、盗難対応の不備を始め警備体制が杜撰で現状に合っていないことを暴露する結果になった。宝石自体の価値、ティアラやブローチとしての工芸の価値、身に付けていた人、一点一点を取り巻く歴史的価値を考えると、とても残念なことだ。何年も前から警告されていたことがクローズアップされる中、責任の所在も曖昧なまま、改善すべきとの結論に留まったままである。「アポロンの間」再開の目処は立っていない。



盗難後もルーブル美術館には多くの人が訪れ、シュリー館内特別展示場では「ジャック・ルイ・ダヴィッド、没後200年特別展」(2025年10月15日～2026年1月26日)が開催中である。ダヴィッド(1748-1825)と言えば「ナポレオンの戴冠式」(1805-1807)(6,21 x 9,79m)を思い浮かべる人が多いだろう。1804年12月2日パリ・ノートルダム大聖堂で行われたナポレオン1世の戴冠

式を描いた大作で、ルーブル美術館所蔵作品中、パオロ・ヴェロネーゼ「カナの婚礼」(1563年)(6,77 x 9,94m)に次いで二番目に大きな絵画である。

ナポレオン1世の発注で、ダヴィッド自身ノートルダム大聖堂での戴冠式に参列し、多くのクロッキーやメモを取り、衣装や装飾品、参列者をリアリズムを以て描き、2年の歳月をかけて完成した。ナポレオン1世が失脚し、1816年王政復古でルイ18世が玉座に着くと

ナポレオン支持者だったダヴィッドはブリュッセルに亡命する。すでに確固たる名声を成していたダヴィッドはブリュッセルでも多くの作品を残し、1825年12月29日ブリュッセルで死去し、フランスに戻ることなくブリュッセルに埋葬されている。

ダヴィッドはフランスの近世から近代に至る波乱の時代を生きた画家だった。1748年裕福な商家の父、画家フランソワ・ブーシェの遠縁に当たる母の間に生まれる。芸術はロ可可から新古典主義へと移り変わる時代である。画家の登竜門「ローマ賞」を受賞し、1775年から5年間ローマに滞在し1780年パリに帰還する。ローマで修行したダヴィッドが好んで描くのはアキレス、ブルータス、ソクラテス、マルスとヴィーナス、パリスとヘレナといったギリシャ・ローマの英雄、神話や伝説の人物である。ローへの忠誠を題材にした「ホラティウス兄弟の誓い」(1785年)、古代ローマの伝説サビンの女たちの掠奪に着想を得た「サビンの女たち」(1799年)を始め多くの傑作を残した。



1789年フランス革命が没発すると、革命を支持し、大作「テニスコートの誓い」を考案する



が作品には至らなかった。1794年テルミドールでロベスピエールが失脚し、2度の逮捕を経て政治に距離を取るが、1799年ナポレオン・ボナパルトとの出会いは決定的で、ダヴィッドなくしてナポレオンは語れない存在になる。

「グラン・サン・ベルナールの峠を越えるボナパルト」(1801年)(260 x 221cm)は、1800年5月アルプス越えのエピソードを描いた作品であるが、ロバに乗って凍えるナポレオンの史実とは異なり、後ろ脚で立ち上がる雄々しい馬に跨り、マレンゴの闘いで勝利する時の軍服を纏い、ギリシャ・ローマの英雄に匹敵せんばかりの勇ましいナポレオンのイメージを作り上げた作品である。野心に燃えて国の頂点に立つために闘うナポレオンとアカデミズムの頂点に成ろうとするダヴィッ

ド、お互いに惹かれ合う関係は明らかである。ダヴィッドのように人や出来事を美化し、劇的に昂めることができる画家は他にいないだろう。

编者注

①「ナポレオン冠載式」(正式名・皇帝ナポレオン一世と皇妃ジョセフィーヌの冠載式)の写真はウキペディアから転写、その他は古賀順子さん撮影。

②「ホラティウス兄弟の誓い」愛国心の故の義務感と家族愛の葛藤。女性たちは永遠の別れを嘆き悲しんでいる。